国際交流員ダニエルの

KANGA KOURYUU

カンガ交流

グルースカップと夏

暑い日が続き「夏が来た」という感じですね。今回は夏をテーマにした北アメリカのインディアンの民話を紹介します。インディアンのアルゴンキン族が信じている神「グルースカップ」のお話です。どうぞ、楽しんで読んでくださいね。

北アメリカのインディアン民話

昔々、アルゴンキン族とグルースカップは一緒に暮らしていました。グルースカップは人々にとても優しく、これまで何度もアルゴンキン族を助けてきました。

ある日のこと、アルゴンキン族の村は大寒波でとても寒くなり、雪ですべてが覆われてしまいました。作物は育たず、火をおこしても体を温めることができません。人々は飢えや寒さで次々と亡くなってしまいました。

グルースカップと「冬の巨人」

見かねたグルースカップは北に向かって旅立ちました。

小さな光を頼りに、猛吹雪の中を何日もさまよいながら進んでいくと、突然、氷でできた大きなテントを見つけました。寒さに凍えながらそのテントに飛び込むと、中にいたのは「冬の巨人」でした。冬の巨人はグルースカップを招き入れ、隣に座って一緒にパイプを吸うように勧めました。パイプを吸うと体が温まり、穏やかな気持ちになりました。

冬の巨人は、昔は全ての土地が白く寒く平和だったことを延々と話し、こっそりとグルースカップに眠りの呪いをかけました。グルースカップは深い眠りに落ち、6カ月近く眠り続け、目が覚めると冬の巨人の姿はありませんでした。そこに告げ口屋の「ルーン」がやってきてグルースカップに「はるか南にはいつも暖かい国があって、冬の巨人を倒す『夏の女』がいる」と話しました。それを聞いたグルースカップは今度は夏の女を探しに南に向かいました。

▲イラスト：Steven Davila
「グルースカップ」

南の地に到着したグルースカップは大きな森を奥に進みました。森の奥には輪になって踊る少女たちと、輪の中には日光を浴びてまばゆいばかりの「夏の女」がいました。それを見たグルースカップは、夏の女の暖気を利用すればアルゴンキン族を救うことができると思い、夏の女と一緒に冬の巨人のところに戻ることにしました。

「冬の巨人」と「夏の女」

冬の巨人のところに戻ると、またしてもグルースカップに呪いをかけようと昔話を始めましたが、グルースカップは同時に話を始めて呪いにかからないようにしました。夏の女を連れていたおかげで冬の巨人は汗をかき始め、氷のテントは溶けてしまいました。すると、辺りを覆っていた雪も溶け、溶けた雪が川になり、植物や動物、人々も目を覚まし、アルゴンキン族は救われました。

冬の巨人はひざまずいて泣き崩れました。夏の女は、「私の力が分かりますよね？もう二度と悪いことをしないのであれば許しましょう。これから6カ月の間、この土地をあなたに任せます。自分の力を加減して前より弱くしてください。6カ月経ったら私はまた戻ってあなたと代わり、この土地を夏にします。この条件で良いですか？」と言いました。冬の巨人はこれに賛成し、それから夏の女は必ず年に一度、アルゴンキン族の土地を訪問しているそうです。

どうでしたか？これからもっと暑くなりますが、皆さん体調には気をつけて夏を楽しんでくださいね。

オージー・スラング・タイム

オーストラリアのスラングを学ぼう

"Waltzing Matilda"

読み方　「ウォルツィング・マチルダ」

意　味　「寝袋を背負って歩く」

「Waltzing Matilda」はオーストラリアの有名な歌で、貧しい放浪者が羊泥棒を働いたことが歌われています。「Waltzing」は「ワルツを踊る」と昔は「徒歩で行く」という意味もありました。「Matilda」は女性の名前に使われる単語ですが、寝袋という意味もあります。この2つの単語を合わせて「寝袋を背負って歩く」というスラングになります。